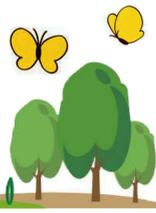




ちょっとそこまで～お散歩日和(地域編)～



光が丘美術館

光が丘美術館に行かれたことはありますか。美術品のコレクターであり、長く田柄に在住だった故鳥海源守氏が平成5年(1993年)に設立した「わたくし美術館」です。彼のお住まいは隣接する民家です。当団地が平成2年(1990年)のスタートであり、翌年の12月は都営12号線として光が丘駅-練馬駅間が開業しています。ということは、バスを利用するしかなく陸の孤島だった光が丘が、徐々に都心へのアクセスが容易になっていく躍動期に、この美術館が開業したことになります。



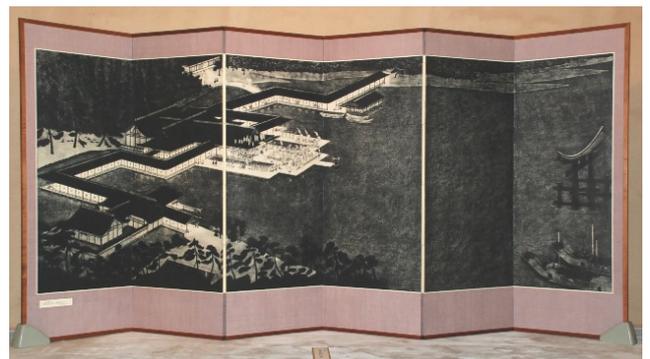
この1,200坪の広大な敷地には2階建ての美術館、陶芸教室の「飯綱山陶房」、そして、そば処「桔梗家(ききょうや)」があります。



創設者の鳥海源守氏の話によると、この美術館は、井上員男氏の紙版画「平家物語」の展示のために作ったのだそうです。したがって、特設展示の際には、2階の壁面全てを使って「平家物語」の屏風全12双が全長76mにも渡って並び、まさに平家物語の幽玄の世界を堪能できることになります。

どうでも良い話ですが、彼のペーパー・ドライポイントの手法は、筆者が中学生時代に、それまでの銅板エッチングと比較して格段に手軽に本格的な凹版画を学べると、教育現場で大流行したことがありました。表面がつるつるの耐水紙を使用するのです。これを使って恵比須様の置物を描いたところ、珍しくコンクールに入賞したので、非常に鮮烈に覚えています。井上員男氏が開発した手法はそんな安っぽいのとは違うと思いますが、基本原理は同じでしょう。

1つだけ「平家物語」の作品について触れると、「厳島御幸」で建物の様相が龍に見えるという話題になっています。手前が頭、拝殿や祓殿が腹、上部の回廊が尾であるというのです。確かにそう見えなくもありません。龍を強者の象徴として崇めるにしても、平家一門がこの後海の泡と化す宿命を象徴するものと捉えるにしても、ストーリー性を感じさせる秀作と言えるでしょう。



ところで、冒頭「わたくし美術館」という耳慣れない表現を用いました。このことについて、簡単に触れておきたいと思います。

そもそも美術館とは、美術作品を中心とした文化遺産や現代の文化的所産を収集・保存・展示し、またそれらの文化に関する教育・普及・研究を行なう施設のことです。英語で「art museum」と言うように、美術品を主たる対象とする専門博物館の一分野ということになります。

中でも、展示を中心とする施設は「ギャラリー」と呼ばれますが、美術館とギャラリーの境界はあいまいで、中間的な施設も多く存在します。一番有名なのは六本木の「国立新美術館」で、あそこは作品を収集・保存せず、展示を実施する美術館ですから機能的にはギャラリーということになります。英語名も「art

center」です。

一般的に言う美術館とは「全国美術館会議」のメンバーを指します。博物館法をクリアした全国の国・公立美術館と大手私立美術館の組織のことです。

この他、例えば「光が丘美術館」のような、小さな私設美術館が、現在日本には240館ほど存在していると言われています。それはさらに「わたくし美術館」と「個人美術館」の2種類に分けられています。

○わたくし美術館…コレクターによる美術館。

○個人美術館 …主にその土地に所縁の美術家を顕彰する目的で設立された美術館。

ということで、光が丘美術館は「わたくし美術館」と称されるグループに属していることになります。

改めてここで美術館の3つの役割について触れておきます。それは、

- ・優れた美術品を収集すること
- ・作品を大切に保存すること
- ・作品を広く一般に展示公開すること

です。ということは、ここ光が丘美術館は極めて良心的な美術館であることが伺い知れます。維持することの大変さを考えると、何とか皆の支えで少しでも長く続けて欲しいと願ってやみません。

館内の様子を、当美術館ホームページの写真から借りてご紹介しましょう。



国立新美術館（六本木）



これらの写真の中で少し異彩を放っているのが、2階の、世界で12台しかないという名門ベーゼンドルファーの「千年祭りグランドピアノ」が展示されていることです。ほぼ月に1～2回のペースで演奏会も開かれています。ベーゼンドルファーは、スタインウェイ、ベヒシュタインと並んでピアノ製造御三家の1つで、多くの人がある名前を耳にしたことがあるのではないのでしょうか。その特別仕様版として、オーストリアの千年祭（1969年）を記念し、会社の威信を賭けて記念ピアノを造ったと聞きました。不確かな情報ですが、No. 1は故ダイアナ妃が、そして、No. 2がこの地にあるピアノだとか。千年祭とは、オーストリアという国名が初めて文書に記された時から数えて千年目のお祭りのことです。蛇足ながら、現在、ベーゼンドルファーはヤマハの系列会社となっています。

さあ、まだ一度も入館されていないという方は、入館料はわずか500円です。是非ともご訪問なさってみてください。

(終)